

大学等名	昭和音楽大学
プログラム名	数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)

リテラシーレベルのプログラムを構成する授業科目について

- | | |
|----------------|----------------------|
| ① 教育プログラムの修了要件 | 学部・学科によって、修了要件は相違しない |
| ② 対象となる学部・学科名称 | |

--

- | | |
|--------|--|
| ③ 修了要件 | 「情報機器演習(応用)Ⅰ」<リテラシーレベル>、2025年度以降の入学者は「データサイエンス・AI入門Ⅰ」を修了すること |
|--------|--|

必要最低科目数・単位数	1 科目	2 単位	履修必須の有無	令和10年度以降に履修必須とする計画、又は未定
-------------	------	------	---------	-------------------------

- ④ 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている」の内容を含む授業科目

[illegible]

- ⑤「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの」の内容を含む授業科目

[illegible]

- ⑥「様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの」の内容を含む授業科目

[illegible]

- ⑦「活用に応じた様々な留意事項(ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする」の内容を含む授業科目

[illegible]

⑧「実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3	授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3
「情報機器演習(応用)Ⅰ」<リテラシーレベル>	2	○	○	○	○						
2025年度以降の入学者は「データサイエンス・AI入門Ⅰ」	2	○	○	○	○						

⑨ 選択「4. オプション」の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目
該当なし			

⑩ プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素		講義内容
(1)現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている	1-1	・ビッグデータ、IoT、AI、生成AI、ロボット(4回目) ・データ量の増加、計算機の処理性能の向上、AIの非連続的進化(4回目) ・第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会(5回目) ・データを起点としたものの見方、人間の知的活動を起点としたものの見方(3回目)
	1-6	・AI最新技術の活用例(深層生成モデル、強化学習、転移学習、生成AIなど)(4回目) ・AI等を活用した新しいビジネスモデル(シェアリングエコノミー、商品のレコメンデーションなど)(2回目) ・基盤モデル、大規模言語モデル、拡散モデル(4回目)
(2)「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの	1-2	・調査データ、実験データ、人の行動ログデータ、機械の稼働ログデータなど(3回目) ・1次データ、2次データ、データのメタ化(5回目) ・構造化データ、非構造化データ(文章、画像/動画、音声/音楽など)(2回目) ・データのオープン化(オープンデータ)(6回目)
	1-3	・データ・AI活用領域の広がり(生産、消費、文化活動など)(3回目) ・研究開発、調達、製造、物流、販売、マーケティング、サービスなど(3回目)
(3)様々なデータ利活用の現場におけるデータ活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの	1-4	・データ解析:予測、グルーピング、パターン発見、最適化、モデル化とシミュレーション・データ同化など(4回目) ・データ可視化:複合グラフ、2軸グラフ、多次元の可視化、関係性の可視化、地図上の可視化、挙動・軌跡の可視化、リアルタイム可視化など(10回目) ・特化型AIと汎用AI、今のAIで出来ることと出来ないこと、AIとビッグデータ(4回目) ・認識技術、ルールベース、自動化技術(4回目) ・マルチモーダル(言語、画像、音声など)、生成AIの活用(プロンプトエンジニアリング)(4回目)
	1-5	・データサイエンスのサイクル(課題抽出と定式化、データの取得・管理・加工、探索的データ解析、データ解析と推論、結果の共有・伝達、課題解決に向けた提案)(5回目) ・教育、芸術、流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等におけるデータ・AI活用事例紹介(3回目)

(4)活用に当たっての様々な留意事項 (ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする	3-1	・倫理的・法的・社会的課題(ELSI: Ethical, Legal and Social Issues) (6回目) ・個人情報保護、EU一般データ保護規則(GDPR)、忘れられる権利、オプトアウト(6回目) ・データ倫理: データのねつ造、改ざん、盗用、プライバシー保護(6回目)
	3-2	・情報セキュリティの3要素(機密性、完全性、可用性) (6回目) ・匿名加工情報、暗号化と復号、ユーザ認証と、パスワード、アクセス制御、悪意ある情報搾取(6回目)
(5)実データ・実課題 (学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの	2-1	・データの種類(量的変数、質的変数) (2回目) ・データの分布(ヒストグラム)と代表値(平均値、中央値、最頻値) (3～5回目) ・代表値の性質の違い(実社会では平均値＝最頻値でないことが多い) (5回目) ・データのばらつき(分散、標準偏差、偏差値)、外れ値(6～8回目) ・相関と因果(相関係数、擬似相関、交絡) (9回目) ・クロス集計表、分割表、相関係数行列、散布図行列(12回目)
	2-2	・データ表現(棒グラフ、折線グラフ、散布図、ヒートマップ、箱ひげ図) (11回目) ・データの比較(条件をそろえた比較、処理の前後での比較、A/Bテスト) (13,14回目) ・優れた可視化事例の紹介(可視化することによって新たな気づきがあった事例など) (4回目) ・相手に的確かつ正確に情報を伝える技術や考え方(スライド作成、プレゼンテーションなど) (15回目)
	2-3	・データの取得(機械判読可能なデータの作成・表記方法) (11回目) ・データの集計(和、平均) (10回目) ・データの並び替え、ランキング(12回目) ・データ解析ツール(スプレッドシート、BIツール) (12回目) ・表形式のデータ(csv) (6回目)

⑪ プログラムの学修成果(学生等が身に付けられる能力等)

<p>学修した数理・データサイエンス・AIに関する知識・技能をもとに人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明し、活用できる。</p>

大学等名 昭和音楽大学

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

① 全学の教員数 (常勤) 64 人 (非常勤) 626 人

② プログラムの授業を教えている教員数 1 人

③ プログラムの運営責任者

(責任者名) 菊池 温紀

(役職名) 教授

④ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)

教育課程委員会

(責任者名) 石田 麻子

(役職名) 教育課程委員会委員長

⑤ プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

昭和音楽大学・昭和音楽大学短期大学部教育課程委員会規程

⑥ 体制の目的

昭和音楽大学及び昭和音楽大学短期大学部の教育課程について各々の教育目的、社会的ニーズ、大学・短大相互の接続等を踏まえた教育課程の編成に関する全学的な方針の策定・検証・評価等を実施することを目的としている。

⑦ 具体的な構成員

教育課程委員会

委員長 石田麻子(学長補佐/教授)

副委員長 酒巻和子(研究科長/教授)

副委員長 有田栄(教授)

副委員長 由雄正恒(准教授)

委員 栃木真理子(学生支援センター部長)

委員 横澤田朋美(教職課程支援室長)

委員 松村亮(授業支援室長)

委員 藤田恵理(授業支援室係長)

⑧ 履修者数・履修率の向上に向けた計画 ※様式1の「履修必須の有無」で「計画がある」としている場合は詳細について記載すること

令和6年度実績	1%	令和7年度予定	2%	令和8年度予定	4%
令和9年度予定	10%	令和10年度予定	10%	収容定員(名)	1,195
具体的な計画					
2024年度は、初年度という事もあり1クラス展開(後期のみ)で開講したが、2025年度の履修状況によって、2026年度は春学期・秋学期に2クラス展開の実施を検討する。併せて、今後のカリキュラム改定において、本教育プログラム該当科目のカリキュラム内での位置づけを、より重要度の高い科目としていく。					

⑨ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等
全学部・学科で本教育プログラム該当科目が履修可能なカリキュラムとしている。

⑩ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

シラバスに授業内容の詳細を記載、履修要綱に本プログラム対象科目であることや履修モデルの履修推奨科目として記載、大学ポータルサイトにて別途本プログラムの周知を行っている。

⑪ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

専任教員によるクラス担任制度により、学生の履修や修学についての相談を受けている。また、事務窓口にて、事務職員による履修などのサポートを行っている。さらに、本教育プログラム該当科目で使用しているメディアルームを、課題などが取り組めるよう授業外の時間に解放したり、より多くの学生がより高度な知識を学べるよう設備の増強の検討を進めている。

⑫ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

本学は Microsoft 365包括ライセンス契約を締結しており、全学生及び教職員が、Microsoft社製の「Microsoft Teams」というグループウェアを使用することができる。これを利用し、Teams上に本教育プログラム該当科目のチーム(グループ)を作成し、講義や演習課題に関する情報共有を実施、担当教員および履修者がチームメンバーとして交流が取れる環境を構築している。また、学修さぼーと(オフィスアワー)において、履修者が授業担当教員に授業時間以外にも授業に関する質問をすることができ、教員から回答を得る(指導を受ける)ことができる仕組みを運用している。

大学等名 昭和音楽大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

内部質保証委員会	
（責任者名）	角南 篤
（役職名）	学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	このプログラムの科目「情報機器演習（応用）Ⅰ」＜リテラシーレベル＞は、令和6（2024）年度は後期のみ開講し、履修者が9名であり、6名の単位を認定、修了率は66.7％である。 内容を十分に修得した者を合格させる方針であったため、修了者の質の担保はされている。なお、今後のカリキュラム改定において、本教育プログラム該当科目のカリキュラム内での位置付けをより重要度の高い科目となるよう、カリキュラムを扱う教育課程委員会に要請し検討を進めていく。
学修成果	メディアルームにおいて、前半は講義、後半は実際にデータを扱う演習という対面形式の授業を実施した。教員はMicrosoft Teams上の本教育プログラム該当科目のチーム（グループ）に授業資料と演習課題を置き、履修生が授業中だけでなく、授業後にいつでも過去の授業内容を確認できるようにした。演習として、主にMicrosoft Excelを分析ツールとして利用し、講義の内容を確認するようにした。演習課題で履修者の理解度を把握しつつ、次回の授業に活かした。各回の課題提出（60％）と成果発表（20％）および主体的学修度（20％）の結果を総合し評価を行った。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本プログラムを構成する各授業の受講学生に対し、「学生による授業アンケート」（以下、授業アンケート）を実施している。各授業の担当者が授業アンケート結果を通じて学生の理解度を確認し、本学のアセスメントプランに示す点検改善サイクルに基づいて、授業改善へつなげている。 また、プログラムの進展に伴い、学生調査として全学で行っている、ディプロマ・ポリシーの達成度を問う「在学生調査」および「卒業時調査」の結果も活用し、授業の改善を行っていく。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	他学生への推奨度については調査を行っていないが、「情報機器演習（応用）Ⅰ」＜リテラシーレベル＞の授業アンケートに関し「総合的にみて、この授業を受講してよかった」という項目には、「そう思う」「少し思う」をあわせて回答者の100％が肯定的に答えている。その結果から推察するに、授業アンケートにおける授業への満足度は高く、本プログラムは学生から一定水準の好意的評価を受けたと考えている。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和6（2024）年度後期からの本プログラム開始となった為、履修者は限定的であったが、令和7（2025）年度履修状況によって、2026年度は春学期・秋学期に2クラス展開の実施を検討する。更に今後のカリキュラム改定において、本教育プログラム該当科目のカリキュラム内での位置づけを、より重要度の高い科目とするカリキュラム改編を検討し、履修者数および履修率向上に努める。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和6(2024)年度後期から本プログラムを開始したところであり、プログラム修了者が地域のそれぞれの組織(企業、自治体、団体等)で数理・データサイエンス・AIを活用することが期待され、今後は学生が就職した組織の意見も聞きながら、本プログラムの改善を検討する。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では毎年、本学卒業生の就職先として想定される企業および「連携・協力に関する包括協定」締結済の企業へ、3つのポリシーならびに学修成果に係る意見交換会を開催している。令和6(2024)年度は、本プログラムについてご意見を伺った所1社より意見を頂いた(以下は要約)。 「本プログラムのカリキュラムは、令和9(2027)年度開設予定の貴学芸術工学部へ続いていく教科ではないかと思われた。これらのカリキュラムが音大で学ぶ事できる点は、これからの学生の職業選択に大きな幅が生まれるのではないかと思われ、期待が持てる。」
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	本科目では第1回目をガイダンスと設定し、今後のデジタル社会において、専門家だけに留まらず一般の利用者にも使いこなすスキルが求められるといった「学ぶことの意義」について説明し、単に数式や計算だけの学びと学生に捉えられないよう「学ぶ楽しさ」についても説明している。また、講義だけでなく、データを扱う演習を毎回取り入れることで、技術的な知識だけでなく、実際にデータを活用できるスキルを身に付け、これらの知識やスキルを「学ぶことの意義」について、履修生が理解できるよう工夫を行っている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	令和6(2024)年度は、前半は講義、後半は実際にデータを扱う演習、課題提出をベースとして対面にて講義を展開した。授業アンケートからは、「初年度ゆえの手探り感がありましたが、一緒に授業を作る楽しさがあった」といった意見を集める事ができ、担当教員と学生間の円滑なコミュニケーションにより学生意見が授業運営へ反映の旨、確認ができた。なお令和6(2024)年度は、「数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム」に連携校とし加入、更なる情報収集に努めている。次年度以降も様々な方面より履修者の主観的評価としての理解度、内容、教授方法の適切性を確認し、より「わかりやすい」授業を構築する事を目指していく。

授業名	データサイエンス・AI入門Ⅰ リテラシーレベル（大・短）		
開講学期	2025年度春学期	開講区分	週間授業
単位	2単位	授業形態	演習
担当教員	菊池 温紀		
曜日・時限	月曜2限	教室	B013（メディアルーム2）
実務経験のある教員 による授業科目		科目ナンバリング	LART129
科目分類		配当学年	1年
授業で使用する言語	日本語		

アクティブラーニング科目				
実技・実習	演習	ディスカッション・ディベート	グループワーク	フィールドワーク
	○			
プレゼンテーション	成果発表	ロールプレイング	反転授業	PBL（問題解決学習）
○				

成績評価		
種別	評価割合	備考
課題提出	60%	
成果発表	20%	
主体的学修度	20%	

以上の方法により総合的に評価を行う。

ディプロマポリシーとの関係性(R7年度抜粋)※R6以前は「履修要綱」関連頁を参照		
専門技能・知識	文化・教養	多様性理解
○		
自己表現力	コミュニケーション能力	実践力
◎		○

求められる成績水準（GPA）の目安
教育到達目標と概要
◆教育到達目標 今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常生活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を主体的に身につけることを本講義の到達目標とします。 ◆概要 数理・データサイエンス・AIが社会および日常生活でどのように使われているか、活用する価値を理解し、これらの知識やスキルを習得することの重要性を学びます。そのうえで、データを読む、可視化する（説明する）、分析する（扱う）といった基礎的スキルを、主にMicrosoft Excelを分析ツールとして利用し、実際の操作演習を通じて学びます。また、これらのデータおよびスキルを利活用する上での倫理的な問題、セキュリティなどの留意事項を学びます。
ICTの活用
データの集計や分析を実際にコンピュータを使って体験することでデータ・AI利活用の技術を身につけます。また、必要に応じて個人所有PC、配付タブレットや個人所有のスマートフォン等も活用します。
学修成果
学修した数理・データサイエンス・AIに関する知識・技能をもとに人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明し、活用できることを到達目標とします。これにより、専門分野の技能やそれを実践する力、およびコミュニケーション能力を発揮するためのツールとして活用できるようになります。

授業展開と内容	
第1回	[ガイダンス] ・授業で使用するPCの使い方、課題の提出方法等に関する説明 ・演習で使用するPC環境、アプリケーションの準備
第2回	[講義] データ・AIの活用により社会で起きている変化 [演習] データの種類（量的変数、質的変数）
第3回	[講義] データ・AIの活用領域 [演習] データの種類
第4回	[講義] 社会で活用されているデータの種類や構造 [演習] データの分布(ヒストグラム)と代表値（平均値、中央値、最頻値）①
第5回	[講義] データ・AI利活用のための技術、データ・AI利活用の現場 [演習] データの分布(ヒストグラム)と代表値（平均値、中央値、最頻値）②
第6回	[講義] データ・AI利活用の最新動向 [演習] データの分布(ヒストグラム)と代表値（平均値、中央値、最頻値）③
第7回	[講義] データ・AIを扱う上での留意事項 [演習] データのばらつき（分散、標準偏差、偏差値）、外れ値①
第8回	[講義] データの比較（条件をそろえた比較、処理の前後での比較、A/Bテスト） [演習] データのばらつき（分散、標準偏差、偏差値）、外れ値②
第9回	[講義] データの集計（和、平均）、データの並び替え、ランキング [演習] データ表現（棒グラフ、折線グラフ、散布図、ヒートマップ、箱ひげ図）
第10回	[演習] 相関と因果（相関係数、擬似相関、交絡）①
第11回	[演習] 相関と因果（相関係数、擬似相関、交絡）②
第12回	[総合演習] これまで学んだ分析手法を用いてデータを分析、考察する①
第13回	[総合演習] これまで学んだ分析手法を用いてデータを分析、考察する②
第14回	[成果発表] 演習結果の発表、授業のまとめ

履修上の注意			
<p>教室のPC、各自保有するPC、タブレットやスマートフォンを併用して授業を進めます。授業で出された課題は必ず提出するようにしてください。</p> <p>講義や演習の進捗にあわせて予定を変更することがあります。</p> <p>外部サービスアカウント（Googleなど無償のサービス）を各自で登録し利用することがあります。授業内で指示します。</p>			
授業外学修の内容と時間			
<p>授業時間に出来たことでも、時間が経つと忘れてしまうことはよくあります。また、方法は一通りではありませんので、自身に合うやり方を見つけ習熟するためにも、授業で習った事を積極的に利用するようにしてください。事前の予習として、操作練習、演習で使用する機材、ソフトウェアの準備など（授業内で適宜指示します）復習として、課題の続きや授業後の振り返りをお願いします。</p>			
予習時間	30分	復習時間	100分
課題に対するフィードバックの方法			
Teamsの「課題」機能を使用し、提出課題に対するコメントと評価によりフィードバックを行います。また、理解が進んでいないと思われる点については授業内でも適宜フィードバックします。			
教科書・参考書			
<p>（教科書）</p> <p>事前に指定する教科書は特にありません。参考文献等は適宜、授業内で説明します。</p> <p>（参考書）</p> <p>AIデータサイエンスリテラシー入門、技術評論社 ISBN978-4-297-13042-8</p> <p>教養としてのデータサイエンス、講談社サイエンティフィク ISBN978-4-06-523809-7</p>			

昭和音楽大学学則

第1章 総 則

(目 的)

第1条 昭和音楽大学（以下「本学」という）は、教育基本法及び学校教育法にしたがい、広く知識を授けるとともに、音楽を中心としたさまざまな領域に関する技能、理論及び応用を深く教授研究し、もって広い視野と高い識見を持つ人材育成を行い、文化の向上と社会の福祉に寄与することを目的とする。

(自己点検・評価)

第2条 本学は、教育研究水準の向上を図り、前条の目的を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する。

- 2 本学は、前項の点検及び評価の結果について、政令で定める期間毎に文部科学大臣の認証を受けた者による評価を受けるものとする。
- 3 点検及び評価に関し必要な事項は、別に定める。

(教育研究上の目的の公表)

第3条 本学は、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学科ごとに定め公表する。

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)

第4条 本学は、授業の内容及び方法の改善を図るための委員会を設け、研修等を実施する。

- 2 前項の委員会については別に定める。

第2章 学部、学科、収容定員及び修業年限

(学部及び学科)

第5条 本学に次の学部及び学科を置く。

音楽学部 音楽芸術表現学科 音楽芸術運営学科

(大学院)

第6条 本学に大学院を置く。

- 2 大学院に関する規則は別に定める。

(収容定員)

第7条 各学科学生の入学定員及び収容定員は次の通りとする。

第4章 教育課程、履修の方法、学修の評価、課程修了の認定及び卒業
(開設授業科目及びその単位数)

第12条 本学において開設する教養科目、外国語科目及び専門科目に関する単位数は別表1のとおりとする。

- 2 教育課程上主要と認める授業科目（以下「主要授業科目」という。）については原則として基幹教員（教育課程の編成その他の学部の運営について責任を担う教員（助手を除く。）であって、当該学部の教育課程に係る主要授業科目を担当するもの（専ら本学の教育研究に従事するものに限る。）又は一年につき8単位以上の当該学部の教育課程に係る授業科目を担当するものをいう。以下同じ。）に、主要授業科目以外の授業科目についてはなるべく基幹教員が担当するものとする。

(履修の方法)

第13条 本学において開設する授業科目は、これを必修、選択必修科目及び選択科目とし、4カ年に分けて履修させるものとする。

(履修科目の登録)

第14条 学生は毎学年度、所定の期日に当該年度において履修する授業科目を登録しなければならない。

- 2 学生は、前項により登録した授業科目以外の授業科目を履修し、また単位を修得することができない。

(単位の認定)

第15条 各授業科目を履修し、試験、その他の大学が定める適切な方法により学修の成果を評価し、合格したものには、所定の単位を与える。ただし、授業料及び所定の学費が未納の場合には、単位の認定は行わない。

(他の大学又は短期大学における授業科目の履修等)

第16条 本学が教育上有益と認めるときは、別に定める規定により、学生が他の大学・短期大学及びその他の教育施設等における学修を、次条に定める既修得単位と併せて、60単位を超えない範囲で本学において修得したものとして認定することができる。

(入学前の既修得単位等の認定)

第17条 本学は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位（第59条の規定による科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本学に入学した後の本学における授業科目の履修により修得したものと同みなすことができる。

3. 教育課程については、第12条の規定にかかわらず、当該入学年度の学則による。

附則1. この学則は、2024（令和6）年4月1日から施行する。

2. 入学者の授業料については、当該入学年度の学則による。
3. 教育課程については、第12条の規定にかかわらず、当該入学年度の学則による。
4. 収容定員については、第7条の規定にかかわらず、令和6年度から令和8年度までは次のとおりとする。

学科名	令和6年度	令和7年度	令和8年度
音楽芸術表現学科	785	800	815
音楽芸術運営学科	410	410	410
計	1,195	1,210	1,225

附則1. この学則は、2025（令和7）年4月1日から施行する。

2. 入学者の授業料については、当該入学年度の学則による。
3. 教育課程については、第12条の規定にかかわらず、当該入学年度の学則による。
4. 収容定員については、第7条の規定にかかわらず、令和7年度から令和9年度までは次のとおりとする。

学科名	令和7年度	令和8年度	令和9年度
音楽芸術表現学科	800	815	830
音楽芸術運営学科	410	410	410
計	1,210	1,225	1,240

(別表1)

(1) 教養科目、外国語科目

科目 の 区 分	授 業 科 目	単位数		
		必修	選択 必修	選択
教 養 科 目	基礎ゼミ	2		
	哲学			2
	文学			2
	西洋文化史Ⅰ			2
	西洋文化史Ⅱ			2
	日本文化史Ⅰ			2
	日本文化史Ⅱ			2
	美術史Ⅰ			2
	美術史Ⅱ			2
	心理学			2
	心の健康			2
	教育心理学			2
	日本国憲法			2
	経済学			2
	生活と経済		2	
	生涯学習概論			2
	ボランティア論			2
	演奏とからだⅠ			2
	演奏とからだⅡ			2
	音響学			2
	ICTと音楽芸術		1	
	情報機器演習（基礎）		2	
	情報機器演習（応用）Ⅰ		2	
	情報機器演習（応用）Ⅱ		2	
	データサイエンス・AI入門Ⅰ			2
	データサイエンス・AI入門Ⅱ			2
	博物館概論			2
	図書館概論			2
	キャリアデザイン			1
	芸術鑑賞①			1
	芸術鑑賞②			1
	ミュージック・コーディネート演習①			1
	ミュージック・コーディネート演習②			1
	ミュージック・コーディネート演習③			1
	ミュージック・コーディネート演習④			1
	ミュージック・コーディネート演習⑤			1
	体育理論			2
	体育実技Ⅰ			1
	体育実技Ⅱ			1
	クリエイティブスタディーズ			1
	日本語文法とコミュニケーションⅠ			1
	日本語文法とコミュニケーションⅡ			1
	日本語文法とコミュニケーションⅢ			1
	日本語と日本社会Ⅰ			1
	日本語と日本社会Ⅱ			1



対象： 大学 音楽学部
短期大学部 音楽科

数理・データサイエンス・ AI教育プログラム

2024年度後期より、大学音楽学部・短期大学部の
在学生を対象とした「数理・データサイエンス・AI
教育プログラム」を開始しました。

このプログラムは、文部科学省が提唱するプログラ
ムで、デジタル社会に必要な数理・データサイエン
ス・AI基礎知識とスキルを学んでいきます。

皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

※2025年度に「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に申請予定

対象科目

基礎的な内容で、Microsoft Excelなどを使用する実践的な
演習を通じて、社会や日常生活でデータを読み解いていきます。

ー教養科目、2単位、春学期月曜2限ー

2025年度
入学者

・ データサイエンス・AI入門Ⅰ

2024年度
以前入学者

・ 情報機器演習(応用)Ⅰ〈リテラシーレベル〉

AIの歴史や技術の基礎を学び、より実践的な演習を通じて
具体的な分野での応用方法について学んでいきます。

ー教養科目、2単位、秋学期火曜3限ー

2025年度
入学者

・ データサイエンス・AI入門Ⅱ

2024年度
以前入学者

・ 情報機器演習(応用)Ⅱ〈応用基礎レベル〉

※各科目内容の詳細はシラバスを参照してください



質問があったら
「教えてジーリオくん」
で聞いてみてネ！！
事務局にチャットで
接続もできるよ！

問い合わせ

昭和音楽大学事務局
学生支援センター 授業支援室

大学等名	昭和音楽大学	申請レベル	リテラシーレベル
教育プログラム名	数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）	申請年度	令和 7 年度

目的

本プログラムは、数理・データサイエンス・AIを社会および日常生活において活用する価値や、どのように使われているかを理解し、これらの知識やスキルを習得すると同時に、倫理的な問題やセキュリティなどの正しい知識を得ることを目的とする。

対象科目

- データサイエンス・AI入門Ⅰ（全14回・2単位）
→ 大学、短大全コースに教養科目として開講

修了要件

- 対象科目の履修と単位修得
→ 卒業要件単位として算入可能

授業展開と内容

第1回	第2回	第3回	第4階	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回
導入 社会におけるデータ・AI活用のトピックを中心とした講義						心得 講義	基礎 データを適切に読み解き、表現するための 基礎的な技術に関する演習				基礎 グループワークと結果発表		

身に付けられる能力

- データを読む、可視化する（説明する）、分析する（扱う）といった基礎的スキルが身に付く
→ 主にMicrosoft Excelを分析ツールとして利用し、実際の操作演習を通じて学びます
- 人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明、活用できるようになる

実施体制

